



朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

支えられていゝることに

感謝しましよ

歌舞伎役者・市川海老蔵さんの奥さん、小林麻央さんは現在、ステージ4のガンで闘病生活を送っておられます。勇気をもってガンであることを告白され、それ以来、毎日ブログを更新されています。子どもの運動会に参加して非常に楽しかったとか、体調が悪く歩くのがつらくなったなどの報告に、日本中の人が一喜一憂し、応援しています。この応援の力、支えは大きいと思います。しかし、一番大きいのはご家族の支えです。ご主人の海老蔵さんやお姉さんの小林麻央さん、お母さんの支えが本当に大きいと思います。



『幸せはガンがくれた』というロングセラーの本があります。副題は「心が治した12人の記録」です。著者の川竹文夫さん自身も、NHKのプロデューサー時代に腎臓ガンを克服された経験をお持ちです。その川竹さんは、ガンは心が治すものと確信し、心でガンを治した人たちを取材されました。

当時、12人のうちのひとり、堀江龍男さんは、肝臓ガンが寛解してから八年ほどが経っていました。堀江さんは50代でガンを発症したのですが、当時は、ガンを告知しない時代でした。最初に、奥さんが担当医に呼ばれ「手術をしても一年、手術をしないと半年の命」と言われたそうです。その時、担当医には「ご主人には内密に」とアドバイスされたのですが、奥さんは家に帰って堀江さんにガンのことを話しました。堀江さんはそれを聞いて背筋が寒くなり、震えがきてどうしようもなくなりましたといえます。当時、ちょうど石原裕



次郎さんがガンで亡くなった後でしたので「石原さんも肝臓ガンで亡くなったな」とか「友だちも胃ガンですぐに死んでしまったな」ということばかりが頭に浮かんできたそうです。

その後奥さんの「食事療法を試してはどうか」との言葉に、堀江さんは「切っても切らなくても半年か一年ならそっちでやってみるか」と玄米菜食をとりいれました。東京にあるクリニク先生の食事指導を受けて始めたそうです。始めた当初は効果もなく、堀江さんは寝たきりの生活だったそうですが、二カ月くらい経つと少し良くなってきて、布団から起き上がり、歩けるようになりました。そのうちに気づいたら半年が経っていました。

何事もなく一年が経過し、「もう治ったのかもしれない」と思った矢先に、血便と血痰が出たそうです。堀江さんは「ああ、やっぱり治ってなかったんだ。一



時的な小康状態だったんだ。ダメかもしれないな」と思ったと言います。すると奥さんが「お父ちゃん、それは良かったね。悪いものが出たのよ」と言ったそうです。それを聞いた堀江さんも不思議と「悪いものが出て良かった」と思えるようになったと言います。

その後は本当に良くなって血便や血痰も出なくなり、三年くらい経った時、病院でエコー検査を受けたところ、ガンがすっかり消えていたということです。

この取材を受けた時、堀江さんは「これだけは川竹さんに言っておきたいのですが、この病気を治してくれたのは食事療法ではありません。治してくれたのは家内です。家内の心の支えがあって私は治ったのです。いやあ、本当に家内はありがたいです」と言われたそうです。

本人の心の力や免疫力は大事ですが、やはり周りの支え、そして、周りの人の積む功德によってそれが大



きくなるのだと思います。

『週刊朝日』という雑誌に毎週、「平成夫婦善哉」という、仲の良いご夫婦のインタビューが載っています。ある週の川田龍平さんご夫妻のインタビューが私の目に留まりました。

川田さんは「薬害エイズ訴訟原告団」の中心になつた人ですが、血友病という血の固まらない病気を患つておられます。この病気を患う方は、出血の際に血が固まるように血液製剤を投与します。その血液製剤にHIVウイルスが入っていたのです。

川田さんがHIVウイルスに感染したのは子どもの頃でした。ですから子どもの頃から、同じ境遇の人がエイズを発症して亡くなつていくのを何人も見て、自分も多分長くは生きられないなとずっと思つていたそうです。そこで、薬害や人為的なトラブルに



よって人が死ぬことは絶対に避けなければいけない
と強く思い、「薬害エイズ訴訟原告団」の中に入りま
した。

川田さんは、自分はいつ死んでもおかしくない。結
婚なんかできないだろうと思っていました。また、
相手を不幸にするかもしれないと思うと、結婚をして
はいけないとも思っていたそうです。

ところが、ジャーナリストの堤未果さんと出会い、
彼女に一目惚れをして、二回目のデートで早くもプロ
ポーズをしました。その時の言葉です。

「僕は今まで、自分の命は短いと思っていた。いつ死
んでもいいと思っていた。でも、あなたに出会ってか
らは一日でも長く生きたいと思うようになった」

しかし、返事がなかなかもらえなくて、デートする
たびにプロポーズをしたそうです。それがある時、未
果さんの心に、結婚しようというひらめきがあって、



プロポーズが受け入れられたと言います。

川田さんと結婚するにあたり、未果さんはある条件を出しました。

未果さんは以前、アメリカ同時多発テロで被害に遭ったニューヨークの世界貿易センタービルの横のビルに勤めていました。あのテロを間近で見、人が大勢亡くなるのを目にした未果さんは、人はいつ死ぬかわからないと強く思ったそうです。

そこで川田さんに「いつ死ぬかわからないけれど、とにかく私よりも一日でも長く生きること」という条件を出したのです。それと、川田さんが口癖のように言っていた「自分はどうせ長くは生きられない」という言葉を今後、絶対に口にしないこと」も付け加えました。言葉は「言葉」とも言います。言葉には大きな力があるから、絶対に悪いことは口にしないでほしいと求めたのです。



そして「今日一日を大切に生きたいから夫婦喧嘩はしないようにしましょう。どうしても喧嘩してしまつたら、必ずどちらかが家を出るまでに仲直りをしましよう。喧嘩をしたまま、どちらかが死んでしまつたら、ものすごく後悔するから」とふたりは約束を交わし、結婚したのです。そして結婚後、健康状態が劇的に良くなつたのです。

HIV感染者は定期的に、免疫状態とウイルスの量を計るそうです。

未果さんとの約束を大切にして、一日でも長く生きよう」と誓つた川田さんが、検査でウイルスの量を計つたところ、ウイルスが非検出になつていたそうです。免疫力を示すCD4という数値は、健康な人で700〜1300で、HIV感染者は200を切るとエイズを発症するとされていますが、結婚してから1000近くになつたそうです。時に、過労でぐったりしてい



る主治医より高かったことがあるそうです。風邪も引かなくなりましたそうです。

奥さんの支え、また奥さんを大事に思う気持ちが無
疫力を高めて、エイズウイルスを非検出にしてしまっ
たのだと思います。

ここまでではご夫婦のお話をしてきましたが、最後は
友情のお話です。

今から五百年ほど前、ルネッサンスの時代に大活躍
をした画家アルブレヒト・デューラーは、ドイツのニ
ュルンベルクで生まれました。デューラーにはハンス
という友人がいて、二人とも貧しい家の生まれでした
が、二人とも幼い頃から絵を描くのが大好きで、将
来は画家になりたいという夢を持っていました。

二人は版画を彫る親方のもとで見習いとして働いて



いしましたが、仕事しごとが忙いそしく全く絵えの勉強べんきょうができません。仕事しごとを辞やめて絵えの勉強べんきょうに専念せんねんしようと思おもいましたが、絵えを習ならうには絵具えのぐやキャンバスや筆ふでを買かうお金かねが必要ひつようです。二人ふたりにはそんなお金かねはありませんでした。

ある時ときハンスがデューラーに「このままでは二人ふたりも画家がになる夢ゆめを捨すてなくてはいけない。しかし、僕ぼくに良い考かんえがある。一人ひとりずつ交代こうたいで絵えの勉強べんきょうをしよう。一方ほうが働あいて相手あいてのためにお金かねを稼かせいで助たすける。そして、勉強べんきょうが終わおったら今度はもう一方ほうが勉強べんきょうするため、勉強べんきょうを終おえた側がわが働あいてそれを助たすけるんだ」と提案ていあんしました。そして、どちどちが先さきに絵えの勉強べんきょうをするか話はなし合あいました。お互たがいが譲ゆずり合あったのですが、結局けっきょくハンスが言いいました。

「デューラー、君きみが先さきに勉強べんきょうしてほしい。君きみの方が僕ぼくより絵えがうまいからきつと早く勉強べんきょうが進すすむと思おもうんだ」

デューラーはその言葉ことばに感謝かんしゃして、イタリアのベネ



チアへ絵の勉強に行きました。そしてハンスは、お金がたくさん稼げる鉱山に勤めることになりました。

デューラーは、一日でも早く勉強を終えてハンスと代りたいと、寝る時間も惜しんで絵の勉強を続けました。一方、ハンスはデューラーのために朝早くから深夜まで重いハンマーを振り上げ、今にも倒れそうになるまで働いてお金をデューラーに送りました。

一年、二年と年月が過ぎて行き、そろそろデューラーの勉強も終わるかと思ったのですが、勉強すればするほどもっと勉強したくなり、なかなか終わることができません。ハンスは「自分が良いと思うまでしっかりと勉強してくれ。僕は大丈夫だよ」と手紙を書き、お金を送り続けました。

数年経って、ようやくデューラーはベネチアから帰ってきました。その頃には画家として腕を上げ、絵も売れるようになり、かなりの評価を得ていました。



故郷に帰ったデューラーは真っ先にハンスのところに向かいました。

「今度は君の番だよ。長い間本当にありがとう。待たせたね。今度は僕が生活費を稼ぐから思う存分、絵を描いてくれ」

するとハンスは力なく笑い、首を横に振ったのです。「おめでどう。本当に良かったね。でも僕はもうダメなんだ。炭鉱での仕事が多すぎて指が曲がってしまったし、手も震えて絵筆が持てないんだ」

デューラーはショックで「僕のために君は人生を棒にふるってしまった。君を犠牲にしてしまい本当に申し訳ない」と震える声でハンスに詫言いました。自分の夢が叶ったものの、友人の人生を台無しにしてしまったことで、デューラーは罪悪感に襲われる日々を過ごしました。

そして、何か僕にできることはないだろうか



「少しでも彼に償いをしたい」と思い、もう一度ハンスの家を訪ねました。ノックをしても応答がありません。しかし、人がいる気配がします。鍵が開いていたので家の中に入っていくと、ハンスの小さな声が聞こえてきました。ハンスは炭鋏で働くことになって曲がってしまった指を合わせ、一心に祈っていたのです。「デューラーは私のことで傷つき、苦しんで、自分を責めています。神さま、どうかデューラーがこれ以上苦しむことがありませんように。そして、私が果たせなかった夢までも彼が叶えてくれますように。あなたの守りと祝福がいつもデューラーとともにありますように」

デューラーは自分の耳を疑いました。

「ハンスはきっと自分のことを恨んでいるだろう」と思っていたのです。ところが、自身のためでなく、デューラーのために一生懸命祈っていたのです。歪んで



しまった手を合わせ、一心にデューラーのために祈っていたのです。

デューラーはその祈りの姿を見て涙にくれました。そして「お願いだ。君の手を描かせてくれ。君のこの手のお陰で今の僕があるんだ。君のこの手の祈りで今僕は生かされているんだ」と懇願しました。そしてデューラーは、友情と感謝の心を込め、「祈りの手」という題の絵を描きました。

デューラーは非常にたくさんさんの絵を描き、多くの傑作を残しましたが、一番有名なのがこの「祈りの手」です。

人はいろいろな形で家族や友人、多くの人に支えられています。それに対する感謝の気持ちをもいつも持つて生きなければいけません。

